

ジョニー・アップルシードの宗教

大賀 睦 夫

I はじめに

本稿はアメリカにおけるスウェーデンボルジャニズムの展開過程を描こうという筆者の計画の一部をなすものである。

18世紀スウェーデンの科学者・神学者エマヌエル・スウェーデンボルグの名を知る人はあまり多くない。その著作を読む人はまれであろう。しかし、スウェーデンボルグの影響は実は非常に大きい。ただしその事実は知られていない。その理由は長くなるので別の機会に譲ろう。ともあれスウェーデンボルグの死後、イギリスで生まれたスウェーデンボルグ信奉者の組織はアメリカで成長の機会を見出した。これはデノミネーションリズムというアメリカの宗教社会の特徴と密接に関わる。キリスト教会は一千年以上にわたって国家と結びつき絶大な排他的影響力を行使してきた。これに対しアメリカでは政教分離・宗教の自由が実現し、自らの宗教的理想を追い求める人々はここに安住の地を見出すことになったのである。その結果歴大な数の宗教グループがアメリカで繁栄を謳歌するようになった。これらの宗教グループは church や sect ということばに伴う正統と異端というニュアンスを避けるため denomination と呼ばれている。⁽¹⁾ 一例をあげると、モルモン教などは有名かつ巨大なデノミネーションということになる。

さてスウェーデンボルジャン教会というと、数あるアメリカのデノミネーションの中でも規模の点から言ってほとんど最下位にランクされることになるであろう。しかしその影響力はトップクラスなのである。なぜか。それを描こ

(1) Mead (1963) 第7章を参照。

うというのが本稿を含め筆者の今後の執筆計画なのであるが、いくつか話題を先取りしておくとして、まずここで扱うアメリカンヒーロー、アップルシードはスウェーデンボルグだったということがあげられる。その他、フランクリン、ジェファソン、ロバート・モリスといった独立革命のリーダーたちがスウェーデンボルグの著作の購入者リストに名を連ねていた。リンカン大統領の周囲には多数のスウェーデンボルグの友人がいた。奴隷解放運動や女性運動のリーダーの多くがスウェーデンボルグだった。「アメリカの良心」エマソンはスウェーデンボルグだった。「プラグマティズムの祖」ウィリアム・ジェイムズ、「小説の神様」ヘンリー・ジェイムズ兄弟の父ヘンリー・ジェイムズ Sr. はスウェーデンボルグについて12冊もの本を著したスウェーデンボルグだった。ヘレン・ケラーは熱烈なスウェーデンボルグだったことを『わたしの宗教』の中で告白している。

これらはスウェーデンボルグの影響力の大きさを示唆する事実の一例であるが、意外なことにこのような事実が注目を集めることはこれまでほとんどなかった。そこでそのような事実を掘り起こし、アメリカ社会におけるスウェーデンボルグの思想の影響について考えてみることに意義があるのではないかと筆者は考えるようになったわけである。取り上げるべき話題は多いが、まずはスウェーデンボルグ、アップルシードの物語から始めることにしよう。

Ⅱ スウェーデンボルグ信奉者アップルシード

ジョニー・アップルシードは、アメリカ合衆国が建国されて間もない頃に、当時の西部開拓の舞台であったオハイオ、インディアナを中心にリンゴの木を植えた人物である。わが国ではあまり知られていないが、アップルシードといえばアメリカではたいへん有名なパイオニア・ヒーローである。彼についての歴史家による研究論文、伝記のほか、彼を扱った小説、詩、歌、さらには映画・ビデオもある。アップルシードの名を冠した博物館、学校、教育組織、出版社、公園、道路があり、銅像・記念碑などのモニュメントも多数ある。1966年には記念切手も出た。彼の事績を称える子供向けの絵本も今日多数出版されてい

る。

実はこのアップルシード、熱烈なスウェーデンボルグ信奉者であったが、こちらのほうはアメリカでもあまり知られていない。もっぱらリンゴを植えたことだけが紹介されるが、リンゴの木を植えるという彼の行った役立ちは実はスウェーデンボルグの教えにもとづいていたのであり、これを見落とすとアップルシードという人物がわからなくなってしまう。つまりなぜ彼が人びとのためにリンゴの木を植えたのかという動機の部分が、なぞとして残ってしまうのである。人間の行為を最終的に決めるのは、その人の宗教であり信仰心である。アップルシードが信奉したスウェーデンボルグの宗教思想がわからなければ、アップルシードの事績も理解できないであろう。アップルシードは敬虔なクリスチャンであったという一般的説明では、彼の行為は十分には理解できない。わが国で紹介されたアップルシードの物語でも、彼の信仰の側面はあまり扱われていないので、本稿ではこの問題を中心に扱うことにしたい⁽²⁾。しかし、まずはともあれ、アップルシードがどのような人物であったかという話から始めることにしよう。

1. アップルシード伝説

ディズニー映画『メロディー・タイム』(1948)はジョニー・アップルシードを風変わりなアメリカン・ヒーローとして描いている。それは次のようなストーリーである。

ヒーローは自らの力を示す象徴をもっている。ポール・バニヤンは斧、ジョン・ヘンリーはハンマー、デイヴィ・クロケットはライフルといったように。しかしアップルシードの場合はそのような力の象徴とは無縁である。帽子がわりのなべとリンゴの種を入れた袋、聖書が彼の代名詞である。アップルシード

(2) アップルシードに関する邦語文献はあまりない。もっとも詳しいのは亀井俊介(1993)の第12・13章に収録されている論文だと思われるが、スウェーデンボルグについてはごく簡単な説明があるだけである。田村晃康(1983, 1984)はアップルシードの中に「禅僧の趣」を見ている(83ページ)が、それはスウェーデンボルグの宗教思想が仏教に似ているという意味で理解できないわけではないが、アップルシードはスウェーデンボルグに帰依したのであるからスウェーデンボルグによって説明すべきである。

(リンゴの種) はニックネームで、本当の名はジョン・チャップマンという。背は低く、やせて小柄な男だった。1806年頃はピッツバーグ近郊のリンゴ園でリンゴの世話をしていた。しかし新天地をめざす男たちの高らかな足音を聞くようになると、自らも西部開拓を夢見て落ち着かなくなった。とはいえ西部は屈強な男たちの世界であり、ひ弱な自分は開拓者という柄ではないとも思う。そこに老人の姿をした天使が現れ、ジョニーに西部へ行くことを命じる。ジョニーは未開の地にリンゴを植えるために、リンゴの種と聖書をもって出発した。ナイフも銃ももたずに西部へ行ったのは彼が初めてだったが、彼は動物を含む土地の住人たちとすぐに仲良しになった。そしてリンゴを植えた。彼はリンゴを植えただけでなく豊かな信仰心と勇気も広めた。40年以上西部を歩き回り、次々にリンゴ園をつくっていった。このようにして彼は大西部のすみずみに足を運び、行ったすべての土地を愛と信仰とリンゴの木で満たした。やがて天国からの迎えが来る。この世でもっとリンゴを植えようと思っていた彼は抵抗するが、天国にはこの世以上に仕事があると天使に説得され、二人で天に昇っていく。リンゴの花のように見えるうろこ雲は、ジョニーが切り開いた天国のリンゴ園を表しているにちがいない。

最初にディズニーアニメが描くアップルシードを取り上げたのは、それがほぼ今日のアメリカ人のアップルシードのイメージになっているからである。とくにこれをきっかけに子供向けのアップルシードの本が洪水のように出版されるようになった。内容もほぼディズニーを踏襲している。しかしここに紹介されたアップルシード伝説には、筆者がアップルシードとの関連で取り上げたいと思うスウェーデンボルグが出てこない。ここではアップルシードはスウェーデンボルグの著作ではなく、聖書を携えて西部へ行ったということになっているが、それが本来のアップルシード伝説で語られてきた内容なのであろうか。もしそうであればアップルシードはスウェーデンボルグであったという説は何が根拠になっているのだろうか。それを根拠づけるはっきりした事実があるのだろうか、といった疑問が湧いてくる。そこでまず本来のアップルシード伝説はどのようなものなのかというところから調べることにしよう。

2. アップルシード伝説はどのようにして生まれたのか？

アップルシードの話には民間伝承と作者のはっきりしているフィクションがあるので、これらは明確に区別すべきであろう。次に民間伝承にもいろいろな話があって、事実にもとづく「アップルシード伝説」と単なるつくり話の「アップルシード伝説」とが混じりあっているようである。したがってこれも可能な限り区別しなければならないであろう。ただしアップルシードはおよそ200年前にフロンティアを歩き回った一庶民であり、残された確実な資料は少ない。ヘンリー・ソローのように森の生活の記録を残すこともなかった。そういうことを考えると事実とフィクションを厳密に分けることは不可能かもしれない。問題は難しそうであるが、ロバート・プライスが指摘しているように、⁽³⁾アップルシード伝説は徐々に成長してきたものなので、年代ごとに見ていくと比較的整理しやすいかもしれない。真偽を百パーセント明確にすることはできないとしても、そのように伝説を整理していけば、アップルシードの虚像と実像がいくらかなりとも鮮明になってくるのではないだろうか。

2.1 最初の証言

まずアップルシードが紹介された最初の文書から見てみよう。意外なことだが彼の活動が最初に紹介されたのはアメリカにおいてではなく、イギリスにおいてだった。1817年、イギリス、マンチェスターの「エマヌエル・スウェーデンボルグの著作の印刷・出版・普及をはかるマンチェスター協会」の報告書において次のように紹介されているのが最初とされている。アップルシード42歳のときのことであった。

「西部の辺境に一風変わった新エルサレム教会⁽⁴⁾の伝道者がいる。物質的欠乏や肉体的苦痛はほとんど意に介しない。はだしで歩き、家の内でも外でもど

(3) Price (2000) 参照。

(4) 新エルサレム教会は新教会とも言う。スウェーデンボルグの教説にもとづく教会である。

こでも寝ることができ、わずかな粗食を常食とする。実際に彼は、はだしの足で氷を解かす。

彼は新教会の本で手に入るものならなんでも用意し、遠くの開拓地に出かけ、読者がみつかればどこでも本を貸す。そしてしばしば一冊の本を二・三部に分け、より多くの人びとに配布し役立てる。この人物は過去何年もの間、数え切れないほど多くの未開地の（二、三エーカーの）わずかな土地にリンゴの種をまき、苗木を育てるといふ仕事に従事してきた。

これらの仕事は開拓者がやってくるようになると貴重なものになる。そしてすべての利益は、彼のスウェーデンボルグの全著作を発行し合衆国西部の開拓地全体に配布するという目的のために使われるのである⁽⁵⁾」。

ここにみられるようにアップルシードを最初に取り上げたのは新教会関係者だった。リンゴの苗木を育てたということより、むしろ新教会の熱心な伝道者という側面に注意が向けられている。まだアップルシードは一般にはそれほど有名であったわけではなく、おそらく当時のアメリカ東部の新教会関係者の間で話題になっていたのであろう。ここに描かれたアップルシードの人物像、すなわちフロンティアで極端に質素な生活を送りながら果樹園を経営し、スウェーデンボルグの著作を紹介した人物というのは、その後の証言でも繰り返し出てくるので、ロバート・プライスは、これは史実に基づくものであろうと考えている⁽⁶⁾。スウェーデンボルグの本を分割して配布したというのも事実のようである。当時の製本は今日とはちがって数ヶ所をひもでとじるようなもので、簡単に分冊にすることができたらしい。これがアップルシードについて文書によって残された最初の証言である。

2.2 第二の証言

次に重要な文書が出るのが30年後の1847年である。この年、アップルシ

(5) Jones (2000), pp. xiv-xv.

(6) Price (2000), p.5.

ードが中西部地方で有名な存在になっていくきっかけをつくったヘンリー・ハウの著作 Henry Howe, *Historical Collections of Ohio* が出版された。これは中西部を扱った地方史の書物であるが、この中で2ページの分量ながらアップルシードについての記述があった。この書物はよく読まれたので、アップルシードの物語が中西部の民衆の間に広がっていくうえで重要な役割を果たしたのである。本書でハウは、アップルシードはスウェーデンボルグ信奉者であり、簡素な生活を送り、冬でもはだしで歩いたと言い、あたかも原初のキリスト教徒のようであったと紹介している。これは1817年の紹介に合致する内容である。そしてそれに加えて、次のようなエピソードも紹介している。

蚊が火に飛び込んで死ぬようなことがあれば、キャンプの火を消した。ねぐらにしようとした丸太の空洞に熊の親子が寝ていたので彼は雪の上で寝た。噛みついたガラガラヘビを衝動的に殺してしまった自らの非情さを嘆いた。粥なべを帽子がわりにかぶっていた。コーヒー豆用の麻袋を外套として着た。さらにこんな話もある。パリサイ人のような巡回牧師が「今、はだしで天国に旅するキリスト教徒がどこにいるのか」と絶叫すると、材木の上に腰を下ろして説教を聞いていたアップルシードがはだしの足をぶらぶらさせながら「ここにいるぞ」と答えて巡回牧師を狼狽させた。

話の真偽を調べるときに問題になるのが、その話の出所である。ハウの場合はどうだったのであろうか。彼はこの書物を書く際、アップルシードが果樹園をもっていたとされるオハイオ州マンスフィールドやリッチランド・カウンティなどで聞き取り調査を行い、民衆の間で語られていたアップルシードのエピソードや証言を収集している。以上のエピソードはそれらにもとづくものである。しかし彼はプロの研究者というわけではなかったので、事実かどうかということの検証は必ずしも十分に行っていない。また1847年といえばアップルシードはすでにこの世にはいないし、彼についての証言といっても、何十年も前にそこに一時的に滞在しリンゴを植えさらに西部へと去っていった旅人についての証言だからずいぶん昔の記憶をたどることになる。つまりハウが紹介したのは、アップルシードについての人びとの遠い過去の記憶や民間伝承だっ

たのである。したがって上述のエピソードは事実にもとづくものかもしれないが、民間伝承として語られていたものであり、真偽のほどは定かではない。とくに粥なべを頭にかぶるというのがアップルシードのトレードマークになっているが、これについては直接的証言としてはここ以外にはないとプライスは述べている。またコーヒーの袋を外套代わりに着るというのもハウの紹介から一般に流布した話だ⁽⁷⁾という。

2.3 第三の証言

アップルシードが全米で知られるようになったのは *Harper's New Monthly Magazine* の 1871 年 11 月号にのった新聞記者 W. D. ヘイリーの紹介記事 Johnny Appleseed, a Pioneer Hero によってであった。これは 7 ページにわたるもので、紹介記事としてはかなりの分量がある。この中でヘイリーは、従来アップルシードについて語られてきたことをほぼ網羅的に紹介し、それにさらに新しいエピソードをつけ加えている。ヘイリーもまたオハイオの出身で、ジョニーについて記憶している土地の古老の話を集めたという。内容を紹介すると、まずアップルシードの風貌について詳しく述べ、子供たちに愛される人柄、インディアン（アメリカ先住民）との良好な関係、質素な生活、スウェーデンボルグへの信仰、苗木屋としてのビジネス、彼の博愛主義、ユーモアのセンスなどについてのエピソードを紹介し、1847 年（実際は 1845 年）の死でしめくくっている。

ヘイリーによると、アップルシードは背が低く、針金のようにやせていて、黒みがかった髪を長くたらし、あごひげはうすいがのび放題で、いつもせわしなく動き、眼光は鋭い、といった人物だった。ふだんはどんなに寒くてもはだしで歩いた。服はリンゴの苗と交換したぼろぼろの古着だった。それでも子供たちにプレゼントするためのきれいなリボンやキャラコを用意しておくというやさしい人柄だったので、子供たちに人気があった。

奇妙ないでたちと行動、驚異的忍耐力によって、インディアンからは呪医

(7) Ibid., p. 14.

medicine man とみなされて尊敬されていた。1812年の戦争のときも彼はインディアンに攻撃されることなく森を歩きまわることができたので、インディアンの攻撃を察知すると開拓者たちに警告したという。ある月明かりの夜、家から家へと走って開拓者たちにさしせまった虐殺の危機を知らせた。そのときジョニーは次のように言ったという。「主の霊が私にのぞんだ。主は私に油をそそぎ命ぜられた。荒野でラッパを吹き鳴らせ、森で警鐘を鳴らせ。なぜなら、見よ、異教徒の群れがあなたがたの戸口を取り囲み、焼き尽くす炎がその後が続いているからだ」。この雑誌が出たのが1871年なので、これは59年前のアップルシードのことばということになる。そんな昔に語られたことばが正確に伝えられるだろうかとプライスは疑問を呈している。彼が本当にそう言ったのかどうかを確認するすべはないが、1812年の戦争の際、インディアンの襲撃の危機を開拓者に知らせながら、救援を求めてマンسفールドからマウントバーノンまで夜通し走り、マンسفールドの人びとを救ったということが実際にあったようである。これはそのときの話かもしれない。⁽⁸⁾

ヘイリーはまたアップルシードがスウェーデンボルグの非常に熱心な弟子であったことを紹介している。そしてアップルシード自身、スウェーデンボルグのように天使と話をする体験をしたという。彼のスウェーデンボルグへの傾倒ぶりを示す次のような話がある。はだしで毒ヘビだらけの森を歩いて怖くないのですかと聞かれると、にっこり笑って懐からスウェーデンボルグの著作を取り出し「このお守りがあるからどこでも絶対だいじょうぶですよ」と答えた。

彼の博愛主義はすでにハウの紹介で見たとおりであるが、ここではそれはスズメバチや馬にまで拡大されている。あるときジョニーは一人の開拓者を助けて道を切り開いていたが、うっかりスズメバチの巣を壊してしまった。怒った一匹のスズメバチがジョニーを繰り返し攻撃し刺そうとしたが、彼はやさしく手で遠ざけるだけで決してスズメバチを殺さなかった。また虐待されている馬を見たり、そのような馬がいると聞くと、彼は馬を買い取り別のやさしい開

(8) 「ジョニー・アップルシード遺産センター」長のジョーンズ氏は1813年8月9-10日の夜のことと確認できるとしている。Jones (2000), p.98.

拓者に無償で譲った。あるいはけがをしたり、年をとって役に立たなくなって捨てられた馬たちがいると、寒くなる前に彼らを集めてえさと避難所を与え、春になって元気になると緑の草地に放した。彼は生き物を殺したり生き物に苦痛を与えたりすることは許されない罪と考えており、食べるために動物を殺すことも決してなかった。

ビジネスについては、アップルシードは果樹園業者であり、リンゴの苗を売ったのであって常に無償で与えたわけではない。しかし値段は安かったし、ぼろぼろの古着と交換することもあった。そして払えない人には無償で与えた。彼の目的は荒野を実り豊かな土地にすることであって利益を得ることではなかった。そのようにヘイリーは述べている。

ヘイリーによるとアップルシードは1847年にインディアナ州アレン・カウンティの開拓者の家を訪ね、そこで亡くなったことになっている。駆けつけた医者がこのように安らかに死を迎える人を見たことがないというほど穏やかな死だったという。

3. フィクション

このヘイリーによる紹介と前述のハウの著作、そしてここでは扱わなかったがオハイオの作家ロゼラ・ライスの回想記が幾度も出版されてアメリカ中に広まっていったとプライスは述べている⁽⁹⁾。それらの物語が詩人や小説家のイメージネーションを刺激し、アップルシードは多くの詩でうたわれ、小説でも扱われることになったのである。そのようなわけで、膨大な数のアップルシード賛歌やフィクションがあるが、それらは主としてヘイリーたちの著作を情報源にしているのであるから、古いものでも1870年代からということになる。

アップルシードを讃えた詩の中でもっとも古いもののひとつとされているリディア・マリア・チャイルドの『アップルシード・ジョン』(1880)は次のようなものである。

(9) Price (2000), p.17.

あわれジョニーの腰は二つに折れ曲がった、
長年の労苦と骨折りで。
しかしなお彼は大きい豊かな心で信じていた、
人に思いやりのある行為をしなければならないと。…

老ジョニーは言った。…
「わたしのすすむ道がある」。

彼は働いた、いっしょうけんめい働いた、
しかしだれも彼の心に秘めた思いを知らなかった。
彼は仕事の報いに熟れたリンゴを受け取った、
そしてていねいにリンゴの芯を取り出した。

袋をいっぱいになると出かけていった、
そして幾日もだれも彼を見なかった。…

彼はとがった杖で穴を掘り、
芯をひとつ入れては、
土をかぶせ、立ち去った
太陽と雨と風とにゆだねつつ。

こうして彼は旅を続け、時が過ぎ、
やがて人は彼を老アップルシード・ジョンと呼ぶようになった。

チャイルドもまたスウェーデンボルグに傾倒した人物で、スウェーデンボルグを調べるうちにアップルシード伝説にも出くわしたらしい。ここでは他者のために献身的に働くアップルシードの姿が理想化されてうたわれている。

ところでアップルシードをうたった詩は何百とあるそうだが、筆者が参考

にしたマードックの論文で紹介されているのは約20の詩である。これらを読むとアップルシード賛歌の多くは、彼の謙遜な人柄、清貧の生活、そして英雄的行為など伝説中のエピソードから気に入った部分を取り上げて詩人のイマジネーションで膨らませてうたうという形式をとっている。それら多数のアップルシード賛歌の中で、次に紹介する歌はやや異彩を放っている。これはヴェイチェル・リンゼイによる黙示録を思わせる幻想的な詩の一節である。⁽¹¹⁾

「太陽への旅立ち」と呼ばれる山の頂で、
私は老ジョニー・アップルシードをもう一度見た。
彼はリンゴを食べ、芯を放った。
そして向きを変え、微笑んで、
それが断崖の割れ目に落ちていくのをぼんやりと眺めた。
その瞬間、リンゴの木があった、
その根は私たちの足元の岩を割った、
するといくつかのリンゴが緑の山すそをころがった、
そしてそれらのリンゴから妖精たちが飛び出し、自由に飛びまわった。

アップルシードの登場する小説はいくつかあるが、もっとも重要なのはおそらく1920年に出たヴェイチェル・リンゼイの『スプリングフィールドの黄金の書』⁽¹²⁾である。もっとも重要というのは、そこでアップルシードが極限まで理想化されているからである。神を信じる素朴な果樹園業者ジョン・チャップマンは、人びとのために西部全体にリンゴの木を植えた聖者アップルシードとして民衆によって伝説化された。アップルシードはアメリカ人の道徳的生き方のお手本となったが、リンゼイはそればかりでなく、アップルシードにさらに社会的、政治的な意味をも付加した。彼が取り上げるのはアップルシードの「思

(10) Murdoch (2000) 参照。

(11) Ibid., p. 47.

(12) Lindsay (1920).

想」である。アップルシードはスウェーデンボルグに帰依したのであるから、それは限りなくスウェーデンボルグの思想に近づかざるをえないのだが、その思想こそアメリカン・デモクラシーを救う原動力になりうるというのが『スプリングフィールドの黄金の書』のメッセージである。政治的な意味合いの濃い小説であるが、背景にはこれが書かれた20世紀初頭の政治状況があるように思われる。20世紀初頭といえはアメリカでは大企業の力が強まって金権政治、政治腐敗がはびこり、これに対抗する革新主義の運動が登場してきた時代である。本書もそのような背景のもとで理解すべきであろう。以下、内容を簡単に紹介しておこう。

舞台は1920年のイリノイ州スプリングフィールド。予知能力をもった人びとが100年後のスプリングフィールドのヴィジョンを見る。紀元2018年に、スプリングフィールドに「黄金の書」が現れ、それがすべてを変貌させ人びとをあげなうであろうというヴィジョンである。天から下ってくる「黄金の書」は金色に輝きながら、大聖堂の壁を影のようにすり抜け、祭壇の上に舞い降りる。牧師が朗読するこの書の教えを聞こうと大勢の人びとが集まってくる。そして教えを聞いた人びとは生まれ変わり救われる。小説ではこの「黄金の書」はスプリングフィールドを建設したハンター・ケリーなる人物が天上で書いたということになっている。そしてハンター・ケリーは、ジョニー・アップルシードの弟子であり友であったとされている。したがって2018年に「黄金の書」が到来するというのは、まさにそのときにアップルシードの教えがよみがえるということなのである。

2018年のスプリングフィールドには、アップルシードがハンター・ケリーに与えたリンゴの種から「常花のリンゴ園」が育っている。そのリンゴを食べた者は永遠の美への愛で心が満たされる。アップルシードはまたハンター・ケリーにどんぐりをも与えた。それらは巨大なオークの木に成長しているが、その実を食べた者は、永遠の善への力を得て正義の探求に向かう。さらにリンゼイはリンゴとどんぐりに加えて「黄金の雨の木」というシンボルも使っている。これはデモクラシーのシンボルとされている。「黄金の雨の木」の木陰に入る

と、永遠のデモクラシーへの感情が沸き起こる。興味深いのはデモクラシーを意味する「黄金の雨の木」が直接アップルシードに由来するものではないとされていることである。それはニュー・ハーモニーで西部開拓のヒーロー、ダニエル・ブーンの信奉者たちによって植えられたという想定になっている。そしてブーンの信奉者たちは、「常花のリンゴ園」をたいへん重んじたとされる。このように「黄金の雨の木」を愛する者は「常花のリンゴ園」も愛するというかたちで、「黄金の雨の木」とアップルシードは間接的にむすびつけられているのである。これらの隠喩はなかなか意味深長である。すなわち西部で生まれたアメリカン・デモクラシーは、真善美にしたがって生きるというアップルシードの理想を基礎としなければならない。そうリンゼイは主張しているのである。かくして、アップルシードはアメリカン・デモクラシーが依拠すべき根本的価値のシンボルとなった。アップルシードの理想はスウェーデンボルグに由来するのであるから、リンゼイはアメリカン・デモクラシーの基礎はスウェーデンボルグの思想でなければならないと考えたとも言えるであろう。

ちなみにリンゼイ自身はスウェーデンボルジャンではなく、キリスト教諸教派の統一を熱心に説いたキャンベルの徒 Campbellite であった。

4. 大衆化

今日ではアップルシードを主人公にした絵本が多数出版され、子供たちでさえ彼について知るようになったが、そのきっかけをつくったのが1948年のディズニー映画であったことは冒頭に述べたとおりである。これによってアップルシード伝説が大衆化されると同時に、スウェーデンボルグという名前も消え、アップルシードは聖書を手にして西部へ出かけたという話になる。このディズニー映画はそれ以外の点ではアップルシード伝説にかなり忠実なので、原作者がスウェーデンボルジャンとしてのアップルシードを知らなかったはずはない。明らかに意図的にスウェーデンボルグという名前は削除されているのである。おそらくスウェーデンボルグという名前を出すとめんどろな解説が必要になるので、聖書で置きかえたのではないだろうか。

とはいえこの映画にはスウェーデンボルグを想起させる部分があつたといへん興味深い。まず第一に、ここで天使が登場するが、それは普通の老人の姿で描かれており羽をもった白衣の天使ではない。これに「奇妙な姿であるが、アップルシードは天使はそういう姿をしていると思っていた」というナレーションがつく。ここは、天使は人間の姿をしており羽はないというスウェーデンボルグの報告そのままである。第二に、天使が天国にはたくさん仕事があるといってアップルシードを説得する場面。天国にはたくさん仕事がある、天使は忙しく仕事をしているというのもスウェーデンボルグの重要な教えである。なにげない話のようであるが、ここには天界的平安は怠惰な生活によってではなく他者のための役立ちの生活によって得られるというメッセージが隠されている。そして第三に、うろこ雲を天界のリンゴ園の象徴とみなしている部分。これはスウェーデンボルグの宗教思想の重要な概念である相応に関わる。聖書は相応のことばで書かれているとスウェーデンボルグはいう。聖書のことば一つひとつに文字の意味だけでなく、内的な意味がある。いうなれば聖書に出てくるものはすべてスピリチュアルな何かを表す象徴なのである。神がイスラエルの民を雲の柱で導いたり、人の子が天の雲に乗って来るといわれたり、聖書の中では雲は非常に神聖なものの象徴とされている。スウェーデンボルグによると、雲は神の真理を表す。この映画でも雲をアップルシードの善行を表す美しい象徴として使っているところがなかなかスウェーデンボルグ的なのである。この映画はスウェーデンボルグという名前は削除しているが、スウェーデンボルグのアイデアは生かしているように思われる。そしてそのことがこの映画に深みと詩的味わいをつけ加えているのも確かであろう。

ところがディズニーをきっかけに次々に出版された子供向けのアップルシードの絵本のほとんどは、すっかりスウェーデンボルグとは無縁の物語となっており、内容的にも浅薄になっているような印象を受ける。そして今日ではこれらの絵本によって多くの人々がアップルシードについての情報を得ているようである。ともあれ、そのような事情でアップルシードは有名になったが、スウェーデンボルグはあまり知られていないということになったのである。

アップルシード伝説は以上のような経過をたどった。彼は最初に新教会で紹介され、次に歴史書や雑誌でパイオニア・ヒーローとして取り上げられ全米で知られるようになり、さらにディズニー映画でたいへん有名になった。今日では真偽の判断を下せないアップルシードのエピソードもいろいろ伝わっているが、大筋のところははっきりしている。彼はスウェーデンボルジャンであり、清貧な生活に甘んじ、荒野に40年以上リンゴの木を植え続けた。実際にアップルシードはそのような生涯を送った人物だったのである。

Ⅲ アップルシードの実像

さてここでアップルシード伝説から離れて、事実として確認されているジョン・チャップマンのプロフィールと事績⁽¹³⁾を記しておこう。

ジョン・チャップマンは1640年代にイギリス、ヨークシャーからボストンに移り住んだエドワード・チャップマンの6代目の子孫である。ジョンはエリザベス・シモンズとナサニエル・チャップマンの第二子であり、1774年9月26日、マサチューセッツ州レミンスターに生まれた。1775年6月25日に、会衆派教会 Congregational Church で洗礼を受ける。父ナサニエルは大工で農夫で革命戦争の兵士だった。1776年7月18日に母エリザベスが死亡。父ナサニエルは1780年夏に除隊し、マサチューセッツ州ロングメドローのルーシー・クーリーと再婚。彼らには10人の子供が生まれた。

果樹園業者としてのチャップマンの経歴は、1792年彼が18歳のときに、異母弟のナサニエルとともに西部に旅立ったときから始まる。1790年代、チャップマンはペンシルバニア州東部のウィルクスバリーあたりの果樹園で仕事をしていた。その後さらにオハイオに移りリンゴの種から苗を育てる果樹園業者となる。リンゴの苗を育てた人はもちろんチャップマンだけではなく、彼は巡回する点でユニークだった。ジョニーは開拓者の波が押し寄せる前に、西部に行って将来の開拓者の到来を見越して苗を育てた。もちろんそれは金儲けのためではなく、荒野を実り豊かな土地にするためであったということはずで

(13) 以下の記述は Smith (2000) に依拠している。

に述べたとおりである。

1806年に彼はオハイオ川をカヌーで下っているのを目撃されている。1811年にはヒューロン・カウンティーのファイアランドに来ている。1812年の戦争の頃は先にも見たとおり、マンスフィールドあたりにいた。1812年の戦争が終わると彼はさらに西に移りモーミー溪谷に進出している。セントメアリーズでよく見かけられた。1821年にはデトロイトまで旅をした。1828年にはディファイアンス近郊に果樹園をつくった。同年にインディアナ州フォートウェインに行き、自分の家を建てた。1830年代はイリノイにいた。カンカキー川流域で苗木畑をつくった可能性がある。1842年にはオハイオへ最後の旅をしている。1843年にはアイオワにまで行ったという記録がある。1845年3月18日フォートウェイン近郊の友人宅で肺炎のため亡くなっている。彼は西部のすみずみに行ってリンゴの木を植えたというデイズニーの話はもちろん誇張で、実際には彼の果樹園はほぼオハイオとインディアナに限られている。

またジョニーはもっとも初期のアメリカのスウェーデンボルジャンであり、熱心に新教会の伝道活動をした。彼の主要な活動は、開拓者の家に『天界と地獄』などのスウェーデンボルグの著作を置いていくことだった。彼のことでいえば「天界から届いたばかりの良い知らせ good news fresh from heaven」を広める活動である。スミスはチャップマンの活動を裏付ける証拠として、ダニエル・サンという新教会員がシンシナッティに住む同じく新教会員のマーガレット・ベイリーに宛てた1821年5月15日付けの手紙を紹介している。⁽¹⁴⁾

「…新教会関係で少しお伝えすることがあります。オハイオ州ウースター近郊にジョン・チャップマンという人がいますが、彼が最近シュラッター氏に送った手紙によると、彼のまわりでは教義を受け入れる人が増えており、その勢いはデトロイトにまで達しつつあるとのことです。チャップマン氏は、クォーター・セクション⁽¹⁵⁾ごとに新教会への伝道活動を行い、新教会の書で報いるの

(14) Ibid., pp. 76-77.

はどうかと提案しています。彼の願いにどうこたえたらよいか思案中です。この人物は、きっとお聞きになったことがあると思いますが、その地域一帯にリンゴの木を植えてまわったアップルシードという人のことです」。

IV スウェーデンボルグの影響

アップルシードがスウェーデンボルグであったという事実をぬきにしては彼の行為を十分理解することはできないと冒頭で述べた。最後にこの問題を扱ってアップルシードの物語を閉じたい。

アップルシードに対するスウェーデンボルグの影響といえば、まず彼の徹底した博愛の精神をあげることができよう。極端に力強さ、男らしさを強調するアメリカの文化の中で、心優しいアップルシードはまったく異色のアメリカン・ヒーローであった。森で暮らし、インディアンとも仲良くし、決して生き物を殺さず、ひたすらリンゴの木を植え続けた。これは自分を取り巻く環境すべてと調和して生きるという態度であり、自然を征服するといった考えとは正反対である。

このような生き方は、スウェーデンボルグの宇宙論と深い関わりがあるように思われる。スウェーデンボルグの宇宙論は機械論ではなく有機的システム論である。スウェーデンボルグの表現によれば、創造された宇宙万物は全体として役立ちの体系をなしている。何一つとして他者と無関係に存在しているものはない。たとえ岩石のように一見何の変哲もないものにも役立ちがある。土は岩からできるし、土があるから植物が育ち、植物によって動物が養われ、それらの恩恵を受けて人間が生きている。岩にもちゃんと役立ちがある。また植物は種という最初のかたちから成長し、草や木になり、それが実をつけ、また種を生む。それは永遠に続く過程である。あらゆる植物の成長過程の中に種を産み出すという目的があるが、これもまた役立ちである。同様のことは動物についてもあてはまる。このようにすべてはそれぞれの役立ちを担い、全体とし

(15) 1マイル四方の広さの土地が1セクション。半マイル四方の広さの土地がクォーター・セクションであり、これが開拓地の農民が所有した土地の広さだった。

て万物は役立ちの体系をなしている。そしてその役立ちの体系の中で、人間は創造の最終の役立ちを担っているという。すなわち万物の中間的役立ちがあって人間という最終の役立ちがある。そしてその役立ちは人間をとおして始原である神に帰っていく。彼によると、そのような役立ちの体系は全体として見るとひとりの人間のかたちをなしているという。すなわち宇宙万物は人間なのである。それは万物の創造者である神が人間だからである。⁽¹⁶⁾

これはまさに神聖なる有機的システム論といえよう。このような見方に立てば、砂の一粒さえ無駄に存在しているわけではない。アップルシードはこのようなエコロジカルな思想の信奉者であったのであり、環境を傷つけない彼の生き方もこのような思想に由来すると考えられるのである。

スウェーデンボルグの影響として、第二に、彼が「天界から届いたばかりのよい知らせ」といってスウェーデンボルグの著作を配布したことに注目したい。つまりアップルシードは霊界が実在することを信じていた。霊界が実在するとはスウェーデンボルグの宗教思想の核心をなす主張のひとつである。人間は肉体という衣服を着た霊魂であり、その衣服を脱ぎ去った後も霊魂は霊界で永遠に生きる。聖書にそう書かれているからというのではなく、それはスウェーデンボルグの霊的体験によって明白な事実なのである。スウェーデンボルグは霊界に自在に行き来したと主張し、その体験にもとづいて膨大な神学著作を残した。霊界が実在するのは、彼にとってはこの世が実在するのと同様に否定できない事実であった。もちろんあらゆる宗教が来世があることを教えているが、それをスウェーデンボルグほどリアルに説いたものはない。アップルシードはこのようなスウェーデンボルグの報告する霊界と永遠の生命を信じていた。だから現世の富と名声には無頓着だった。そして天に宝を積むことができたのである。

スウェーデンボルグの影響の第三は、彼が善を行ったということである。というのは「悪を避け、善をなせ」がスウェーデンボルグのもっとも中心的な教えだったからである。アップルシードはその教えに忠実だった。「悪を避け、

(16) このあたりは Swedenborg (1763) の第4部を参照のこと。

善をなせ」はあたりまえと思われるかもしれないが、信仰より善をより根源的なものとする教えは、キリスト教の教えとしては異例といえるだろう。善人は信じる宗教がなんであれ、すべて救われるとスウェーデンボルグは繰り返し述べている。つまり信仰すれば救われるといった宗教を決して説かなかったのである。「信仰のみ」の教義はキリスト教的信仰とはいえないとさえいう。信仰は仁愛とひとつでなければ本当の信仰とはいえない。スウェーデンボルグによれば信仰は仁愛と、真理は善と、知恵は愛とつねにひとつである。そしてそれらがひとつになっていけば、そこには必ず役立ちがある。「愛と知恵と役立ちはひとつ」こそスウェーデンボルグ神学のエッセンスである。そして人がこの世で行う役立ちは無数にあり、いかなる役立ちを行うかは一人ひとり異なっている。アップルシードにとっては、それはリンゴの木を植えるということだったのであろう。アップルシードは彼なりに、役立ちの生活というスウェーデンボルグの教えを忠実に実践したのであった。

アップルシードを記念して立てられた石碑のひとつには「彼は他者のために生きた He lived for others.」と刻まれているという。⁽¹⁷⁾アップルシードの生涯をこれ以上に的確に要約したことばはないであろう。彼はその並外れた善行によって多くのアメリカ人の記憶にとどまっているが、その善行の背後にはスウェーデンボルグの教えがあることを忘れてはならない。

引用文献

- Crompton, A. E., (1986), *Johnny's Trail* (Swedenborg Foundation).
- Haley, W. D., (1871), "Johnny Appleseed—A Pioneer Hero." *Harper's Monthly Magazine* XLIII Nov., pp. 830-836.
- Jones, W. E., (2000), "Editor's Update." In Jones, W. E. ed. *Johnny Appleseed: A Voice in the Wilderness* (Chrysalis Books).
- Lindsay, V., (1920), *The Golden Book of Springfield* (The Macmillan).
- Mead, S. E., (1963), *The Lively Experiment: The Shaping of Christianity in America* (Harper &

(17) Crompton (1986), p. 104.

- Row) (野村文子訳 (1978) 『アメリカの宗教』 (日本基督教団出版局)).
- Murdoch, F., (2000), "The Arts Salute Johnny Appleseed." In Jones, *op. cit.*.
- Price, R., (2000), "Johnny Appleseed in American Folklore and Literature." In Jones, *op. cit.*.
- Smith, O. D., (2000), "The Story of Johnny Appleseed." In Jones, *op. cit.*.
- Swedenborg, E., (1763), *Sapientia Angelica de Divino Amore et de Divina Sapientia* (長島達也 訳 (1991) 『神の愛と知恵』 (アルカナ出版)).
- 亀井俊介 (1993) 『アメリカン・ヒーローの系譜』 (研究社)
- 田村晃康 (1984, 1985) 「ほら話 Johnny Appleseed」 (1), (2) 『中京大学文学部紀要』 19 卷